

研究主題「児童の『わかっていくこと』と『できていくこと』を明確にし、  
技ができる喜びを味わわせる指導の工夫  
- 小学校におけるマット運動の学習を通して -」  
東京都教職員研修センター研修部教育経営課  
目黒区立大岡山小学校 教諭 小池 木綿子

研究のねらい

1 研究主題設定の理由

東京都の児童・生徒の体力・運動能力の現状は、依然として積極的に運動する子供とそうでない子供の二極化が指摘されているとともに、全体として現在も低下傾向が続いている。この課題を解決するためには、小学校低学年から「運動することが楽しい」という経験を多く積み重ねることや、発達段階に応じて児童に身に付けさせたい具体的な内容を明確に示して、確実な定着を図っていくことが必要である。これまで、小学校のマット運動の学習では、児童の発達段階に応じて「技ができる楽しさ」を重視した授業展開が工夫されてきた。しかし、「技ができていく」ために必要な「わかっていく」段階を重視した指導の工夫については、十分でない例がみられた。本研究は、児童に「できる喜び」を味わわせていくために、「わかっていく」「できていく」経験の積み重ねを重視した指導の方向性を追究するものである。

2 研究仮説

マット運動の学習において、児童一人一人の「わかっていく」「できていく」段階を明確にして指導をすれば、児童は実感を伴って「わかること」「できること」を積み重ねることができ、技ができる喜びを十分に味わうことができるであろう。

研究の内容と方法

1 基礎研究

先行研究及び文献による研究を通して、次の4点について明らかにした。

(1) 本研究における「わかる」と「できる」のとらえ方

児童の「わかっていく」「できていく」段階を明確にするため、マット運動の学習における児童の「わかる」「できる」姿を分析し、以下のようにまとめた。【表1】

表1 本研究における児童の「わかる」と「できる」のとらえ

「わかる」(「知識・理解」及び「体を動かすこと」でわかる)	「できる」(技能を習得し、応用することができる)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・できそうな気がする。</li> <li>・技のポイントや技の要素についての知識を理解する。</li> <li>・どうすればその運動ができるようになるか試行錯誤する。</li> <li>・知識を生かして思考・判断する。</li> <li>・身体で動き方のコツがわかる。</li> <li>・認識したことを自分の言葉で表現する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・できたことを実感する。</li> <li>・自分の技能として獲得する。</li> <li>・試行錯誤するうちに偶然にできる。</li> <li>・身体能力を高めていく。</li> <li>・一つのまとまった動きが現れ、動ける身体となる。</li> <li>・運動や技能として現れる。</li> </ul>

(2) 児童の「わかっていく」「できていく」段階の明確化

児童が「技ができる喜び」を味わうまでの「わかっていく」「できていく」段階を、児童の姿でまとめた。【図1】「わかっていくこと」と「できていくこと」には段階があり、それぞれの段階で相互に関係している。「知識・理解」及び「体を動かすこと」を通して「『わかっていくこと』が『でき

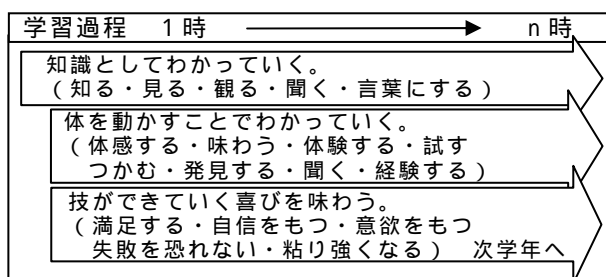


図1 児童の「わかっていく」「できていく」段階

ていくこと』を支えている」ととらえた。

### (3) 児童一人一人の「わかっていくこと」と「できていくこと」をつなぐ要素

「技ができる喜び」を味わわせていくためには、児童一人一人の「わかっていく」「できていく」ことを適切につないでいく要素が必要である。その要素を教員・仲間・自分の三つに分類し、構造化した。【図2】

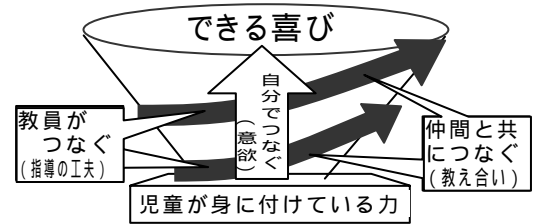


図2 児童の「わかっていく」「できていく」ことをつなぐ要素

### (4) 技の「ポイント」と「こつ」の定義

本研究では「技のポイント」を、技ができるようになるためにオリエンテーションや学習資料等で教員が示す運動の技術や要点ととらえ、すべての技で明確にした。また、技のポイントを身に付けるために、練習をとおして児童が発見した勘や感覚を「こつ」ととらえた。

## 2 調査研究

目黒区立小学校第4・5・6学年の児童435人及び児童を指導する教員73人を対象に、マット運動の学習と指導に関する意識と実態について、質問紙法で調査を行った。

### (1) マット運動の学習に関する児童の意識と実態

腕支持の感覚を身に付ける動きの経験が少ない。

「技ができるようになるために自分に必要な力」として、手や腕の力、柔軟性等の項目を挙げている児童が多い。

技ができるようになるために必要な知識を教員に求めている児童が多い。【図3】

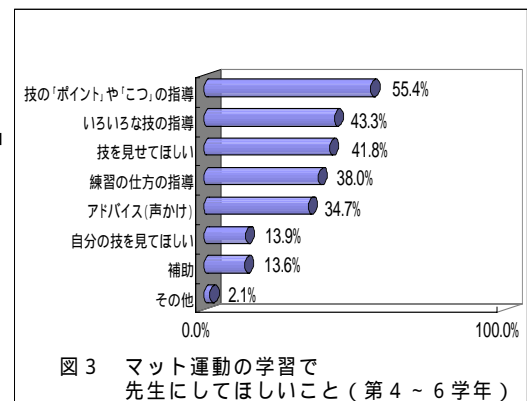


図3 マット運動の学習で先生にしてほしいこと(第4~6学年)

### (2) マット運動の指導に関する教員の意識と実態

「わかって」いても「できない」児童に対する指導の手だては、教員の補助、視覚的な資料提示による理解、練習の場の工夫の順で多い。

マット運動の学習指導で困っていることは、技能の指導、補助の仕方の指導、工夫した場の作り方の順で多い。

### (3) マット運動における「わかること」と「できること」に対する児童と教員の意識

「何がわかった時にできるようになったか」という質問に対して、児童は「こつ」という記述が多かった。一方、教員の約90%は「技のポイント」と回答した。児童は教員の示す技のポイントに加え、技ができるようになる「こつ」を求めているといえる。

以上のことから、身に付けさせたい内容を明確にした系統性のある学習過程の工夫と、実感を伴って「わかる」「できる」経験を積み重ねていく指導の工夫を行い、児童が自らの課題に向かって主体的に学び、「技ができる喜び」を味わう学習を展開する必要性が明らかになった。

## 3 授業研究

### (1) 指導内容を明確にした系統性のある学習過程の工夫

3年間を見通した学習過程【図4】

各学年の系統性を図り、身に付けさせたい内容(およその到達目標)を明確にして、第4・5・6学年の3年間を見通した学習過程を工夫した。第4学年では、基礎的・基本的な技の経験・習得を中心とし、第5・6学年への意欲につなげていく指導過程とした。

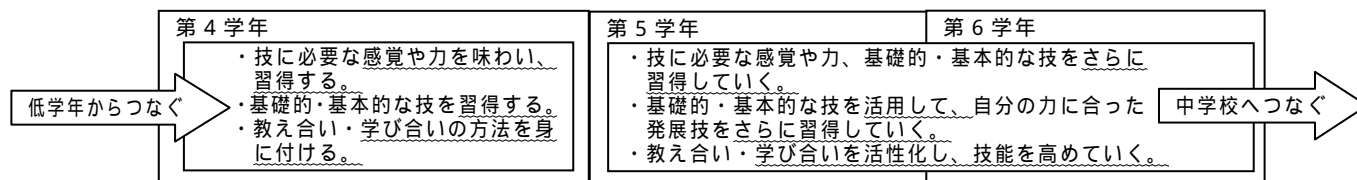


図4 3年間を見通した学習過程

### 第4学年における1単位時間の学習の流れ【図5】

ア 技に必要な感覚や力について実感を伴って「わかる」ようにしていく

技に必要な感覚や力が実感を伴って「わかる」動きや運動を計画的に経験し習得していく「体ならしタイム」を設定した。

イ 基礎的・基本的な技が「わかり」「できる」ようにしていく

基礎的・基本的な技を共通技とし、教員の丁寧な技のポイントの全体指導で、技のポイントや正確なできばえが確実に「わかり」「できる」ようにする「ベーシックタイム」を設定した。

ウ できそうな技が「わかり」「できる」ようにしていく

発展技の群から自分の力に合った技を段階的に選択させ、個に応じる指導を行い、「技ができる喜び」につなぐ「チャレンジタイム」を設定した。

エ 「わかった」「できた」ことを明確にし、次時につなぐ

自分の「わかっている」「できている」ことを明確にする

「わかったできたタイム」を設定し、教え合いを活性化した。

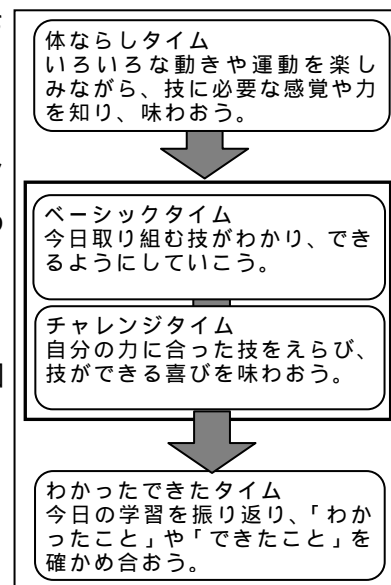


図5 第4学年における1単位時間の学習の流れ

(2) 「わかっていく」「できていく」ことを明確にする学習資料の開発

自分の「わかっていること」「できていること」を明確にする振り返り

「わかったできたカード」による自己評価と「体育ノート」への記述をとおして、自分の言葉で具体的に振り返る。この二つの段階を踏まえ、自分のできばえに対するよさや課題を明確にしていく学習資料を工夫した。

技のできばえについて、よさやつまずきが明確に「わかる」教え合い

表面に教員が示すポイント、裏面に目黒区立小学校第4・5・6学年の児童が技ができた時に見付けた「コツ」をアドバイスとして入れた「技のポイント・アドバイスカード」をすべての技で作成し、教え合いが活性化できるよう工夫した。

(3) 児童が実感を伴って「わかる」「できる」経験を多く積み重ねる指導例の開発

児童のつまずきから、児童一人一人の「わかっていること」「できていること」を明確にし、それらを適切につなぐ教員の具体的な指導例をすべての技で示した「技ごとの指導資料」を作成して、児童が「自分の課題がわかり」、「主体的に学ぶことができる」よう工夫した。

### 研究の結果と考察

#### 1 検証授業から明確になった結果と考察

(1) 「技ができていく」ことを支える「わかっていくこと」

学習後の意識調査では、96.9%の児童がマット運動を「楽しい」「どちらかというと楽しい」と回答した。「楽しい」と感じた理由として「できた」「わかった」ことを挙げた児童は77.4%いた。【図6】また、学習前と学習後における技の達成感の比較でもほとんどの技で達成感が高

まっていた。児童の体育ノートの記述を分析した結果、技を知る・覚えること、技ができるための「コツ」を知る・学ぶこと等が自分で「わかった」と実感できたときに、「技ができるような気がする」「できたような気がする」「できた」という実感につながっていくことが分かった。このことから児童に「技ができる喜び」を味わわせていくためには、実感を伴って「わかる」経験の積み重ねが必要であり、その積み重ねを重視した学習過程の有効性が明らかになった。

児童における学習資料の有効性の調査では、ほとんどの児童がどの資料も「役に立った」と回答した。【図7】「見通しがもてた」「アドバイスの仕方がわかった」「技の流れがわかった」等の回答から、本研究で開発した学習資料が児童の様々な実感を伴って「わかっていくこと」の積み重ねにつながっていったことが分かった。

## (2) 実感を伴って「わかる」経験を積ませていく教員の指導

児童の体育ノートの記述には、「目の位置カードで視線の位置がわかった」「先生が教えてくれた方法で練習したら技ができた」等の実感を伴って「わかった」経験が多く表れていた。児童の「わかっている」「できている」ことを明確にする教員の指導が、実感を伴って「わかる」経験を多く積むことにつながっていることが明らかになった。

## (3) 実感を伴って「わかっていくこと」と児童相互の教え合い

学習後の意識調査で、92.6%の児童が友達との教え合いを「楽しい」「どちらかというとな楽しい」と回答し、具体的な理由として、「教え合いをすることで自分のできばえがわかった」ことを挙げた児童が多かった。教え合いが実感を伴って「わかっていく」ことを支える大きな役割を果たしていることが分かった。

## 2 本研究で明らかになった「技ができる喜び」を味わわせる学習指導の工夫

### (1) 授業展開の工夫

児童の「わかっていく」「できていく」段階を重視する学習を展開し、学習資料を効果的に活用して、児童に実感を伴って「わかった」「できた」経験を多く積んでいくことが必要である。

### (2) 教え合いから学び合いへ

「わかる」「できる」ことに焦点化した全体の振り返りを行い、教え合いを学び合いに高め、活性化させていくことが必要である。

#### 今後の課題

#### 1 系統性を図った指導の在り方の工夫

小学校低学年の「器械・器具を使つての運動遊び」と、中学年・高学年及び中学校の「器械運動」を踏まえ、発達段階に応じて内容の系統性を図った指導計画を作成していく必要がある。

#### 2 他の運動領域に生かす指導方法の工夫

本研究を基に、器械運動領域の鉄棒運動及び跳び箱運動、体育科の他の運動領域における「できる喜びを味わわせる」指導方法について追究していく必要がある。

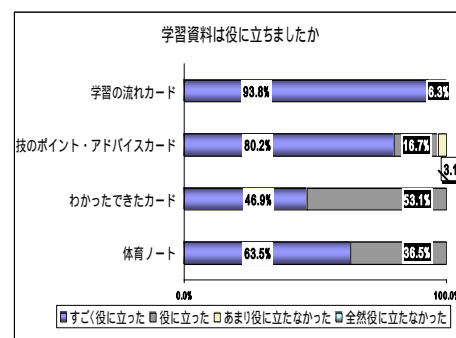
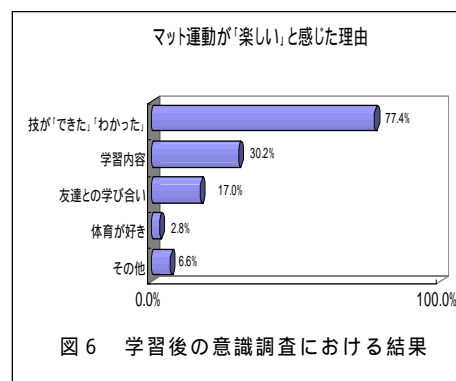


図7 児童における学習資料の有効性